

国旗損壊罪に反対します

山口 洋司

国旗損壊罪なるものが法案化されようとしています。

日の丸を汚したら刑罰をうけるのです。どこの国の話なのか、民主主義の国のはなしなのか、何んのために法案化するのか、今、何か問題が生じたのか、まるで冬眠していた凶暴な熊が突然襲ってきたようです。高市政権は狂っているとしか言いようがありません。

日の丸には嫌な思いだけです。戦時中、疎開先の少年時代でのことです。出征する村の青年団の若者を寄せ書きいっぱい日の丸で送りだし、打ち振る日の丸の小旗の手の感触がまだ乾かぬ内に還らぬ人となって帰ってきました。

軍の行軍や戦場の前線には日の丸がはためきます。銃後のバケツリレーの訓練の場でも必勝と書かれた日の丸の鉢巻きをきりりと、日の丸の小旗がより添います。日の丸が巷にもあふれました。日の丸の旗のもとみんなひとつの思いに流れていき、死んでいったのです。日の丸は国家のシンボル、わたしには日の丸イコール戦争です。

その日の丸が甦っているのが、作今の国際スポーツの場です。勝った選手が日の丸の旗を背に小躍りする、観客席から寄せ書きをした大きな日の丸の旗がゆれる、ほっぺには日の丸のワッペンをはりつけ、必勝の日の丸の鉢巻きで歓声をあげる、まるで戦時中です。

負のイメージの“国家”が本人たちの意識とは別に満開のごとくひらきます。

この光景にわたしは寒けがします。スポーツは体力の限界に限りなく挑戦する選手に感動して拍手を送るものであって、国の勝ち負けではないのです。国でなく選手個人が輝いたのです。オリンピックでも国対抗ではないのです。日の丸など無用です。



『破裂寸前』(国旗損壊罪に物申す)

日の丸を尊重しなかったら罰せられる。理不尽なことです。シロジニアカク/ヒノマルソメテ/アアウトクシイ/ニホンノハタハ この無意味な歌とは逆に日の丸には暗い過去だらけです。その権力の象徴の日の丸を愛せよ、とは無茶なはなしです。

権力の象徴、ゆえに国家に異議がある時は日の丸に物申すことがあります。暴走する高市政権を止めるための象徴的な行為として日の丸を“汚す”自由もあるのです。さまざまな表現行為でも日の丸は象徴になります。それに刑罰がかかる、とんでもない話です。

国家情報局の新設、スパイ防止法制定、そして今回の国旗損壊罪一、生活圏に出てきた熊です。人権を脅かします。退治が必要です。高市さん、狂っている高市政権、憲法をむしばんでいく高市政権、即刻退陣し、日の丸を掲げて山へ帰るべしです。